

徒然草 下段



成敏

花、月、祭りを見て思うこと

徒然草 下段

第三百七十七段 花、月、祭りを見て思うこと

桜の花は満開、月は一点の翳りもなく照り輝く満月、こよなく美しい光景が目には浮かぶが、果たしてこの時ばかりが鑑賞に値するのだろうか。

せっかくの月見を雨に邪魔され月を見る事はできないが、縁側で雨音を聴きながら雲の向こうの月を思う。或いは花の時期に部屋に籠り物思いに耽っていて春の次第に更けゆくのも知らなかった、なんていうのもまた乙なものではないか。

蕾が膨らんで今にも咲きそうな梢や、散り終えて萎れた花びらが庭に広がっている様子も特に見所が多いといってもいいだろう。

「花見に出かけたがすでに散り終わってしまっていて・・・」

「事情があって花見に出かけることができなくて・・・」

という題詞のついた和歌があるが、「花を見て」という題詞のついた和歌に比べて決して劣るものではない。

花が散り、月が沈みかけるのを惜しむというのはもっともな事であるが、「この枝もあの枝も散ってしまってもう見る価値もない」などと野暮な事を言ってはならない。

花や月に限らずすべての事においてその初めと終わりにこそ面白みがあるのだ。

男女の関係もただひとえに関係を結ぶことだけを恋愛というのだろうか。好きな人と関係を結ぶことができなかつた辛さを思い、遂げられない儂い約束を嘆いたり、長い夜を一人で明かし、恋人のいる遠くの空に思いをはせたり、或いは茅萱の生い茂る荒れ果てた家で恋人と二人で過ごしたことなどを偲ぶといったことこそ恋に夢中になっていると言えるのではないか。

翳りなく輝く満月を遙か天空に眺めているよりも、夜明け近くになってようやく出てきた青みがかった月、しかもそれが山の杉の梢にかかって見えたりすることに風情を感じる。木の間に差し込む月の光や、時折雨を降らす群れ雲に隠れた月の様子などはこの上なく趣があるものだ。椎柴、白樫などの濡れたようにつやつやとした葉の上に月の光がきらめいているのは身に沁みて、この思いをわかってくれる友が今ここにいたらいいのに、と都を思い出してしまう。

月や花はそのように目で見るばかりがすべてではない。春は家を出て行かなくても心の中に桜を思い、中秋の夜は寝間の中でも月を思うのがまことに趣あることだ。

立派な人というのはむやみに粋を気取った様子には見えないし、花見も月見もあっさりしたものだ。それに比べて田舎者は何事につけても仰々しい。桜の下では体を捻るように近づきわき目も振らず花を見、酒を飲み、歌い騒ぎ、終には花の咲いている大きな枝を心なく折ってしまう。湧き水には手足を直接浸し、雪には足跡をつけて喜んでいる。すべてにおいて離れて眺めるということをしなない。

そういう人の祭りを見る様子もとても珍妙なものであった。

「行列がくるのが遅い。棧敷で待っているだけ時間の無駄だ」と言って奥の部屋に入って酒を飲み、食事をして囲碁や双六などをして遊んで、棧敷には見張りを置いて「お祭りの行列が近づ

いてきましたよ」と言うと、各々びっくりしたように我先にと棧敷に駆け上り、棧敷の簾は大きく張り出し、今にも落ちそうなくらい押し合い圧し合いして隅々まで見逃すまいと「ああだ、こうだ」と言って、行列が過ぎると「次が来るまで」と言ってまた奥の部屋に戻ってしまう。ただただ行列だけを見ようとしているのだろう。

それに対して都の立派な人は転寝をして行列をよく見てもいない。また若くて官位の低い人たちは貴人への奉仕に立ったり座ったりし、貴人の後ろに控えている人はみっともなく前の人にのしかかったりせず、無理に行列を見ようとする人などいないのである。

いたるところに葵が掛け渡された優雅な通りに夜も明けぬうちからこっそりと見物用の牛車を寄せて席取りをしている光景を目にする。この車は誰のものだろう、あの人のだろうかこの人のだろうかと推測していると、その牛飼いや下僕が顔見知りだったりしてその主がわかったりする。また牛車が趣向を凝らしたものであったり、美々しく飾ってあったりしてさまざまに行き交う様は見えて飽きないものである。

やがて夕暮れが近づくと、あれだけたくさんあった牛車も、所狭しと並んで座っていた大勢の人々もどこへ消えてしまったのかほとんどいなくなる。帰る牛車の混雑も一通り終わると、棧敷の簾や畳も取り払われ、急に目の前がさびしくなってくるのは盛者必衰の定めにも思い当たるものがあり、しみじみとした感じがするものである。

このように都大路の一部始終を見ることが祭りを見るということである。

あの棧敷の前に行き交うたくさんの人々の中に見知った顔も数多くあって、世の中の人数もさほど多いものではないとわかる。たとえ自分の死が、この人たち全員が死んだ後、つまり最後まで生き残るとしても、間もなく自分の番がやってくる。大きな器に小さな穴を開け、水が滴るようにした時、たとえその一滴は小さくとも休む暇なく漏れ続ければやがて水は尽きてしまう。都に多くの人がいたとしても死ぬ日が来ないことはない。

一日に一人、二人ぐらいだろうか。鳥部山や舟岡の墓地、或いはその他の野山でも数の多い日はあっても全くないという日はないのである。だから棺を作る人は在庫しておくことがない。若いからとか、強いからとか関係なく急にやってくるのが死というものである。

今日まで死ななかったということは、まことにありがたい稀な偶然である。不思議なことである。だからほんのわずかな時間でも、この世をのんびりとした先の長いものと思ってよいものだろうか。

財産、国の慈悲

第百四十段 財産

死んで財を残すということは知恵あるものすることではない。つまらない物を集めておいてもくだらないし、良い物であればそれらを集めることに執着していたのか、何と浅はかな、と思われる。またやたらに多くの財産を残せばさらにつまらない。

「これは俺がもらっておこう」などという者が出て後々争いになる。見苦しいものだ。誰かにやろうと思う品があるなら生きているうちに譲っておくほうがいい。

日常なくてはならない必需品だけを持っていれば他には何もいらぬというふうでいたい。

第百四十二段 国の慈悲

全く人情味のない者でも一言ぐらひは良い事を言うものである。関東の荒武者で恐ろしい顔をした男が仲間に向かって「御子さんはおいでか」と訊ねたところ「いえ、ひとりもおりません」との答えに「それでは人の情というものはわからないでしょう。無情な冷たいお方と見えて怖い気がします。子供がいるからこそ何事にも情が湧いてくるのです」とおっしゃられた。まことにその通りである。

恩愛の情がわからなくて、いかにして慈悲の心が芽生えるであろうか。どんなに親不孝者でも、自分の子供を持って初めて親の自分に対する愛情を知るのである。

世を捨て出家し浮世に何のしがらみもない人が、世間のしがらみの中に生きる普通の人を、いろんな事で他人にへつらい、また欲望が深いといって無碍に見下すのは間違ったことである。その人の立場に立ってみれば本当に愛する親のため、妻や子のためには恥をも忘れ盗みだつてするかもしれない。盗人を逮捕し悪事だけを罰するよりは、国民が飢えず、着るものを着て寒い思いをしないような政策を行ってほしいものである。人というのは生活に追い詰められると当たり前の心も失くして盗みに走るものである。

政治がうまく行われず、人々が飢え、寒さに凍えるならば、罪を犯す者も絶えることがないであろう。人を苦しめ、罪を犯させてそれを罰するなど全く理不尽なこと、かわいそうでならない。

ではいかにして人々に恩恵を与えれば良いかという、上に立つものが贅沢、浪費することを止め、人民を可愛がり農業を奨励すれば下々の者にも利益が生まれることに疑いはない。

衣食住が足りているにもかかわらず盗みを働く人を真の盗人として罰するべきである。

災難の相、人相見、三里の灸、鹿角、道を極める

第百四十五段 災難の相

御随身の泰重躬という人が、北面の下野入道信願と言う人に「落馬の相があるからよくよく気をつけなさい」と言った。人々は「まさか」と疑ったが信願は馬から落ちて死んでしまった。そこで人々は重躬の一言を神のようだと思った。

ところで「落馬の相とはどんな相でございますか」と人に聞かれたので重躬はこう答えた。

「乗馬が下手で鞍の上で尻が安定していない上に、気が荒く暴れる馬を好むのだから落馬の相があると云ったまで。何か間違ったこと言いましたかな」

第百四十六段 人相見

明雲座主が、人相見にお会いになって「もしかしたら私、剣難の相が出てはいまいか」とお尋ねになったところ、人相見は「はいそのとおり、剣難の相が出ております」と答えた。「どのような相だ」とお尋ね申しましたところ「傷害の恐れなどない御身分の方が、仮にももしかしたら自分には剣難の相があるのではないかと心配してお尋ねになられる。これこそすでにその相が出ている兆しでございます」と答えた。

その通り明雲座主は木曾義仲の乱で流れ矢に当たって死んでしまわれた。

第百四十八段 三里の灸

四十を過ぎた人が灸をすえ続ける時、三里のツボに灸をすえないとのぼせることがある。必ず三里の灸を忘れてはならない。

第百四十九段 鹿角

新しく生えた鹿角は強壯剤となるが、それを直接鼻にあてて匂いを嗅いではいけない。目には見えない小さな虫がいて鼻から入って脳に至り脳を喰ってしまうという。

第百五十段 道を極める

「上手にやれないうちは人に知られないようにしよう。人に知られないようによくよく練習して体得してから人前に出るのが奥ゆかしいというものだろう」

芸を身につけようとする人が常に言うことであるが、このようにいう人は一芸も習得することはない。これに対して未熟なうちから上手な人たちの中に混じって謗りを受けたり笑われたりしても恥ずかしがることなく平気で芸の稽古に励む人はコツをつかむ天性はなくても滞ることなくそ

の道に打ち込み、勝手気ままをせず年月を重ねれば、才能はあるが精一杯打ち込まない人よりも終には上手の域に達し、人格も十分に備わり人からも立派だと認められ、他に並ぶもののない名声を得ることになる。

天下に知られた名人といえども、初めは下手だという評もあってひどい恥辱に耐えたこともあった。しかし、その人がその道の戒めを正しく守り尊重して勝手気ままなことをしなければ世間に通用する大家として多くの人々の師となることができる。

これはどの道を究めるにおいても変わることのない真理である。

引き際、資朝卿のエピソード1、2、3

第百五十一段 引き際

ある人が言うには、五十になるまでに上手の域に達しない芸事は諦めて捨てるべきである。これ以上精を出して稽古して上達する時間もない。老人がすることを人は笑えないし、また老人が大勢の中に混じって何かをしているのはくだらなくみっともない。大体、五十を過ぎたら全ての事を止めて悠々自適であることが見た目も良く願わしい事である。世俗の事に関わりながら生涯を送るのは最も愚かな人である。知りたいと思うことはちょっと人に訊いて、ある程度納得がいけばそこで止めておくべきだ。

もとより、望む事をしないで済ませられるならそれが最も望ましい事なのだ。

第百五十二段 資朝卿のエピソード1

西大寺の長老の静然上人といえはいかにも徳を積まれたお方だと思えるような、腰が曲がり、眉まで白く、見ているだけでご利益のありそうな人物である。その静然上人が宮中に参られた時、西園寺の内大臣が「何と尊いお姿なのだ」と言って、まるで神様でも拝むかのような様子だったので、日野資朝卿が「あれはただ年を取っているだけです」と内大臣に申し上げた。

その後お叱りを受けたかどうかはわからないが、後日になって、ひどく年を取って痩せ衰えた毛のあちこち禿げたむく犬を

「この犬の様子は何と尊く見える事でしょう」と言って内大臣に差し上げられたとのことをご紹介します。

第百五十三段 資朝卿のエピソード2

京極為兼という人は佐渡に流された後、許されて京に戻り権大納言を務められ六十歳で出家して入道となられた。その為兼の大納言入道が再び幕府に捕らえられ六波羅の庁舎へ武士どもに取り囲まれて引かれていく様子を資朝卿は一条大橋のあたりで見て「何と羨ましい事だろう。この世に生きた思い出としてあのようにありたいものだ」と。言われた

第百五十四段 資朝卿のエピソード3

もう一つ資朝卿のエピソードを。

ある時資朝卿が東大寺の門に雨宿りをしていた折、そこに大勢集まっていた不具者たちが手も足も捻じ曲がり反り返って、体のあちこちが不具なのを見て、皆それぞれに類のない珍しいものだ、大いに鑑賞に値すると思って見ているうちに、やがてその興味もなくなって、醜く不快になってきて、自然に珍妙な物には及ばないと思って家に帰られた。その後、今までは盆栽を好み、普通と違って曲がりくねったのを捜し求めては目を喜ばせていたが、それは不具者を愛で

るのと同じじゃないかと急に興ざめして盆栽を鉢から引き抜いて全部捨ててしまわれた。いかにも資朝卿らしいありそうな事である。

乗馬の名手、専門家と素人の違い

第百八十五段 乗馬の名手

城陸奥守、安達泰盛は並ぶ者のない乗馬の名手だった。厩から馬を引き出させるときに馬が足を揃えて敷居を飛び越えるのをみて「この馬は気が逸っている」といって他の馬に鞍を付け換えさせた。また足を伸ばしたまま敷居に蹴当てるのをみると「この馬はとろいからこけるかもしれない」と言ってその馬に乗らなかった。

乗馬の名手でなかったらこれほど用心しなかつただろう。

第百八十七段 専門家と素人の違い

専門家と呼ばれる人がたとえ不器用であったとしても、器用な素人に勝るものがある。専門家は油断なく用心して軽率にしないのに比べて、素人はやりたい放題だ。これは大きな違いである。

。 芸能や職業だけではなく一般的な振舞いや心遣いについても愚鈍だが用心深くしているのは利益を得るもとである。達者だが身勝手なことは損失のもとである。

取捨選択

第百八十八段 取捨選択

ある人が自分の子供を法師にしようとして「学問をして因果の法則をよく知り、説教などして生計の手段としなさい」と言った。その子は親の教えのとおり説教師になろうと思った。

彼はまず乗馬を習った。輿や車を持っていない自分が法事などに招かれ、馬でも迎えによこされた場合、うまく乗れないで落馬でもしたら格好悪いと思ったからだ。次に彼は、仏事のあと酒などを勧められた際、法師が全然芸無しでは施主が興ざめしてしまうかもしれないからといって早歌というものを習った。この二つが上達すればするほど更に極めたくなり、説教を習う暇もなくやがて年を取ってしまった。

この法師だけではなく、世の中の人々は大体こんなものである。若いうちは大きな夢を抱く。立身出世をし、偉業を成し遂げ、芸事も学問も更に究めようと将来の計画などを立てる。ところが、人生は長いのだからと怠けがちになり、その時々に出くわす目先の事ばかりに気を取られて、何一つ成就することなくいつしか年老いてしまうのである。結局、何も極める事なく、良い暮らしもできず、後悔しても取り返しのつかない年齢になっていて、後は坂を転がり落ちる輪のように急速に衰えていく。

だから、一生の間にそうありたいと願うことの中で、どれが一番自分にとって重要かということをよくよく考え、決定したらそれ以外のことは無視してその目標達成を第一に目指すべきである。

一生のことだけではなく、一日のこと、一時のことであってもそうだ。多くの情報が来る中で少しでも自分に益のあることを見定め、他のことは捨てて大事なことをさっさとやり遂げなくてはならない。あれもこれもとやっていると何一つ成就することはできない。

このことは碁を打つ人が一手も無駄にせず相手に先んじて利の少ない石を捨て、利の大きな石に就くようなものである。3つの石を捨てて10の石に就くのは簡単なことだが、10の石を捨てて11の石に就くのは非常に難しい。ひとつでも多いほうに就くべきなのに10まで取ったのだからと急に惜しくなる。これは捨てずあれを取ろうなどと思っただけは、当然のことだがあれも取れずこれを失う。

京に住む人が東山に急ぎの用事があってすでに東山に到着していたとする。ところが西山に利益の多いことを思いついたら、東山の用事は捨て置き西山に向かうべきである。「ここまで来たのだから東山の用事を先に済ませて、西山のことはどうせ日時指定されたことでもないのだから帰ってから考えよう」と思うからダメなのだ。この一時の怠りが一生の怠りとなるのだ。このことを恐れるべきだ。

あることを成そうと思えば他のことがだめになることを嘆いてはならないし、人の嘲りも恥ずかしいと思っただけはならない。万事に換えてでも、と思わなければ大事は成就しないのだ。

理想の男女像、異種格闘

第百九十段 理想の男女像

妻というものこそ男が持つてはならないものだ。「あの人はいつも一人で暮らしていて」などと聞くと羨ましい気もするが「誰その婿に入った」とか「どこかの女を連れ込んで同棲している」などと聞くと、何だ、そんな奴だったのか、とはなはだ見下げる気持ちになってしまう。特にどうってこともない女だと「あばたもえくぼ」と言われるし、できた女であっても「まるでご本尊を守るように女を可愛がっている。まあ、あいつもその程度の奴さ」と思われる。まして家事一切を切り回す女など実につまらない。子供などできて可愛がったりしているのもいやなものだ。夫が死んだ後、尼になって年を取った様子など見苦しいものである。

どのような女であっても毎朝毎晩顔を見合わせていては心ときめくこともなくなり、いやになるだろう。女自身にとっても夫には嫌われるし、かといって別れては暮らしていけないという、どっちつかずになってしまう。そこで、一緒に住むのではなく時々通ってきて泊まっていくというのが長く付き合うコツと言える。突然男が訪ねて来て泊まっていくというのは、女にとっても新鮮な感じがしていいではないか。

第百九十三段 異種格闘

愚かなる人が他人のことを推測して、その人の知恵の程度を知りえたと思っている。それは大間違いだ、わかる訳がない。

碁を打つことだけが得意なくならない人間が、賢いのに碁が下手な人を見て自分より頭が悪いと決め込んだり、また専門家が自分の専門の事を人がわかっていないのを見て自分がその人より勝っていると思ったりするのは大きな間違いである。学問専修の僧と座禅専念の僧とが互いに相手のことを推測して相手が自分に及ばないと思っているのは双方とも間違いである。

自分の専門の範囲でない人と争ってはならないし、その善し悪しを論じてはならない。

人を読む、罪

第百九十四段 人を読む

達人の人を見る目は少しも間違うところがない。

たとえばある人が嘘をついて人をだまそうとした場合、素直に嘘を本当の事だと信じてだまされる人がいる。またあまりにその嘘を深く信じて、更なる嘘を上塗りする人もある。また嘘を聞いてもなんとも思わず関心を示さない人もいる。またその嘘を何となくおかしいと思って、信じるでもなく信じないでもなく考え込む人もいる。その嘘を本当だとは思っていないが人の言うことなのだから、そういうこともあるのかもしれないとそのままにしておく人がいる。またいろいろ推測してわかった振りをして、利口そうに頷いて微笑みながら実はぜんぜん嘘だと知らない人がいる。また嘘を見破っていながら、自分の推理に間違いがあるかもしれないと疑わしく思う人がいる。また、「大して違うことを言っているわけではないじゃないか」と言って笑う人がいる。また、嘘と知っているのに知っているとは言わず、知らない人と同じように過ごす人がいる。また、初めから嘘と知っていながら、その嘘をついた人と一緒になって人をだます人がいる。

以上挙げたように、愚かな人の間の嘘のやり取りなど見る人から見れば、言葉によって、顔色によって、すべてお見通しなのである。ましてや明智なる人が迷える我々を見るとき、まるで手のひらに置かれた物を見るがごとくに簡単明瞭なことなのである。ただし、方便ということもあるので、このような推測によって仏法まで同様にあれこれと言ってはならない。

第二百九段 罪

他人の田地を訴訟して破れた者が、悔しさから「あの田の稲を刈り取って来い」と何人かを行かせた。その者たちは道すがら他の田でも稲を刈り取って持っていこうとしていた。彼がそれを見て「その田んぼは訴訟していたところではない。何でそんなことをするのだ」と言ったら、「あの田んぼだって刈り取っていい道理などない。どうせ悪いことをしようとしているのだ、どの田んぼだって同じさ」と言ったそうだ。

おかしな言い訳もあったものだ。

富

第二百十七段 富

ある大金持ちが言った「人はすべてのことを差し置いてもひたすらに富を我が物にするべきだ。貧しくては生きている甲斐がない。富める者だけが人間と言える。富を得ようと思うならまずその心がけが必要だ。その心がけとは他でもない。世間はいつまでも変わることなく続くと考え、仮にも無常観など持ってはならない。これが第一の用心である。

次に、人の世は自分のこと他人のこと、やりたい事は無限にあるが、それらをすべてやろうと思ってはならない。欲張っていてもたとえ何億円あっても足りはしない。欲望は途切れる事はないが、財産は尽きてしまう事がある。限りある富で限りない欲望を満たすことなどできるはずがない。やりたい事が心に浮かんだら自分を滅ぼす悪念が入ってきたと、固く用心し恐れて、どんな小さなことにもお金を使ってはならない。

次にお金を下僕のように使うものと思ったとしたらいつまでも貧困から逃れる事はできない。主君のごとく、神のごとく畏れて尊び、下僕のように扱ってはならない。

次にお金の事で恥ずかしい目にあつたとしても恨んだり怒ったりしてはならない。

次に正直で約束事をきちんと守ること。

これらの事を守って富を求めるなら、火が枯れ草に燃え広がるように、水が低きに流れるように富は自ずとやってくる。お金がどんどん積もって尽きないときは、酒や女に溺れず家もあまり飾り立てず、思いがすべて叶わずとも、心はいつも安らかで楽しいものだ」

そもそも人は欲望を満たすために富を求める。お金を宝と考えるのは願いを成し遂げてくれるからである。お金があつたところで使わなかったとしたら貧乏と同じ事だ。何を楽しみにして生きるのか。

この大金持ちの話はただ世間的欲望を断ち貧乏を憂えてはならないという教えに聞こえる。欲望を満たして楽しみとするのだったら財産などない方が良い。

疽という皮膚病に罹った者は患部に水をあてて気持ちいいと思う。しかし水をあてて気持ちいい思いをするよりも病気に罹らない方がいいに決まっている。欲望に惑わされずお金を使わないということになると貧富の区別はないという事だ。悟りを開いた者も迷える者も同じだという事だ。

お金持ちになりたいと願うのはお金を持ちたくないという無欲に似ているのである。

親切はさりげなく、知識をひけらかす

第二百三十一段 親切はさりげなく

園の別当入道は比類ない料理人である。ある人のところで見事な鯉が客の前に出された。皆別当入道の腕前を見たいと思ったが、気軽に見せてくれとは言い出せずにいる。ところが別当入道は気のきいた人で「このところ100日間鯉を料理してまいりました。今日この見事な鯉を目の前にして断るわけにはいかないでしょう。ぜひとも私にやらせてください」と言って料理した。大変興のあることだったとその場に居合わせた人々が言っていたと、ある人が北山の太政入道殿にお話したところ、入道殿は「ずいぶんキザな言い方でわしは好かん。『ちゃんと料理できる人がいないのなら私が料理しましょう』と言えば良かるうに、何で百日の鯉を切るなどと言わなきゃならないのだ」とおっしゃったと、またある人が話していた。私も面白いと思った。

一般にわざとらしく趣向を凝らしてやってみせるより、そのような趣向を凝らさずに自然にやっつけてのける方が素晴らしいことである。客へのもてなしなどもその折々に風情があるように計らって出されるのも実際いいものだが、ただ何気なく出されたご馳走はなお良いものだ。人に物をあげる時も、折を見て計らうのではなく「これを差し上げましょう」と言ってあげるのが本当の好意というものだ。出し惜しみすれば相手が欲しがらるだろうと思って、相手が所望すればあげようとか、勝負事にかこつけて負けたらくれてやろうとかいうのは不愉快なものだ。

第二百三十二段 知識をひけらかす

人というのはあまり学識・能力をひけらかさない方が良い。ある人の子で風采など悪くない者が父親の前で他の人と話をしている時、史書の文言を引用した。賢そうに聞こえはしたが、目上の人の前ではそんなことをしないほうがいいのにと思われた。

またある人のところで琵琶法師が物語を語るのを聞こうと琵琶を取り寄せたところ琵琶の柱がひとつ落ちていた。「新しく作ってつけなさい」と主人が言った時、そこにいた格好良い青年が「使い古した柄杓の柄はありませんか」と言った。男は爪を伸ばしていた。多分琵琶など弾く者かもしれない。しかし盲法師の弾く琵琶は雅楽などで弾く琵琶と違って柄杓の柄で処置するものではない。琵琶の事を本当に知っているのか、とそばで聞いていて聞きづらいものであった。「柄杓の柄は檜物木といって琵琶の柱には向かないものなのだ」

若い人というのは些細な事でも立派に見えたりひどく見えたりするものである。

欠点、心の実態、聖海上人の涙

第二百三十三段 欠点

何事にも欠点なきようにありたいと思うなら、どんなことにも誠実で、人を区別せず敬意を表し、口数少ないに越した事はない。老若男女、そういう人がいいのだが、特に若くて格好良い人が言葉遣いもきちんとしていると心がひきつけられ忘れがたいものである。

すべての欠点は、何でもできるように上手がって、我が物顔をして、人をないがしろにするところにある。

第二百三十五段 心の実態

人が住んでいる家には他人が勝手に入ってくることはありえない。反対に空き家だと道行くひとがやたらに立ち寄ったり狐や梟などが住み着いたりする。木霊などというよからぬ物まで出没するようになる。

また鏡には色も形もないからあらゆる物がそこに映るのである。鏡そのものに色や形があったなら他の物がそこに映る事はないであろう。

空間はあらゆるものを容れることができる。私たちの心の中に色々な思いが自由に浮かんで現れるのも、心というものに実態がないからであろうか。もし心に主がいたとしたなら、胸の中に多くの思いが勝手に入り込むことなどないであろう。

第二百三十六段 聖海上人の涙

丹波の国に出雲というところがある。そこに出雲大社から神霊を勧請して立派な神社を造った。しだの某という人の所領だったが、そのしだの某が聖海上人やその他の多くの人々を誘って「どうぞおいでください、出雲詣でに。だいふくなどご馳走しましょう」と言ってその一行を連れて出雲まで行った。おのおの神社に拝してえらく信仰心を起こした。

拝殿の前の獅子と狛犬が背中合わせに立っていたので聖海上人はとても感心して、「何と素晴らしい。この獅子の立ち様はとても珍しい。きっと深い謂れのあるに違いない」と涙ぐんで「皆さん、この素晴らしいものを見てなんとも思われませんか。それではあんまりです」などと言った。人々は各々不思議がって「本当ですね、他の獅子や狛犬とは違いますね」「都へのお土産話にしましょう」などと言っていたので、上人はいっそうその謂れを知りたくなった。そこでかなり年配で物知りそうな神官を呼んで「この神社の獅子の配置はきっと由緒あることなのでございましょう。その謂れなどを話してはもらえないでしょうか」と訊ねた。「そのことでございます。いたずら好きの子供たちがやったもので、全くけしからん事です」と言って獅子と狛犬を元の位置に向き合わせて去っていった。上人の流した感激の涙は無駄になってしまった。

後悔先に立たず、三つの欲

第二百四十一段 後悔先に立たず

満月の真ん丸いのは一瞬たりともそのままではなくすぐに欠けてしまう。気をつけてみていない人には一晩のうちにそれほどまでに変わっていく様子も見えないだろう。病気の重くなる事も、そのままの状態を続ける間もなく死期が既に近づいている。けれども未だに病気が急変せず死にも直面しないうちは、人はいつまでも平安に暮らせるものだと思う。

元気なうちにあれやこれやと多くのことをやり遂げて静かに仏の道の修行をしようと思っているうちに病に倒れ、死に直面したとき思いはひとつも成就していなかったということになる。長年のことを後悔して、もし病気が治って命を取り戻せるならば今度こそ昼夜兼行であのことこのこと怠らずに成し遂げようと誓いも新たにすが、やがて病は重くなり、正気をなくし取り乱して死んでしまう。

世の中はこの類ばかりであろう。この事実を世の人々は今すぐ心に留め置くべきである。自分の願い事をなして暇ができてから仏道を修行しようとするならば、思い尽きない幻のような人の一生のうちに何をなす事ができよう。欲望とはすべて妄想である。願い事が心に浮かんだら、誤った考えが心を乱すのだと自覚して何ひとつやっけてはいけない。

即座にすべてのことを放り投げて修行の道に向かうとき、心に何の障害もなく、身に成す行為もなく、心身ともに長く穏やかである。

第二百四十二段 三つの欲

人間が永遠に逆境と順境に使役されているのは、ひとえに苦を離れ楽を求めたいからである。楽というのはこれを好み愛する事である。これを求める事に終わりはない。願い欲するところのひとつは名声である。これには二種類あって、品行・行状と学問・芸能の良い評判である。第二に色欲、第三に食欲である。ありとあらゆる思いもこの三つに及ぶものはない。

これらの欲は誤った考えから起こってきて多くの苦悩を伴う。だからこれらの欲を追求しないに越したことはない。

第二百四十三段 父

八歳の時、父に問うた事がある「仏とはどういうものですか」父が言うには「仏とは人間がなるものなのだ」ということだ。私はまた訊いた。「人はどのようにして仏になるのでしょうか」父はまた「仏の教えによってなるのだ」と答えた。私はさらに問うた。「その教えた仏を教えたのは何者でございますか」「それもまた前の仏によって成ったものなのだ」「ではそれを教え始めた最初の仏はどんな仏でございましたか」と訊いたとき父は「天から降ってきたのであろうか、それとも地の底から湧いて出たか」と言って笑った。

「子供に追い詰められて答えられなくなってしまいました」と多くの人々に語って面白がっておられた。